リストの絶大を認めて神を認めざるは原因なきに結果を思ふものである、種子なきに實の成熟を信ずるものである。げに神はイエスが人格の背後より、絶大なる力を以て、其存在を自證して居給ふのである。我等はイエスを通して臨む神の存在の證明の壓倒的なるを如何ともすることは出來ぬ。

イエスの「父」としての神を認めたる余は第二に亦宇宙の根原的大勢力としての神を理論の上に認るに至つた。神を造物主（クリエータ）と云ふ。しかし乍ら大工が木を組みて家を建つるが如く、陶器師（すゑものし）が土を捏（こ）ねて陶器を造るが如くに神が宇宙萬物を造りたりとは、理論の上に否定し得ぬと共に肯定し得ぬ事である。所詮神が宇宙萬物を生み出せし方法如何は我等の窺（うかゞ）知し得る處でない。創世記第一章に記さるゝ天地創造の經過は、其精神に於ては深き意味を有するも、之を文字通に信ずることは猶太教信者（ユダヤ）ならぬ我等が堪へ得ぬ處である。たゞ我等の理論の上に知る處は宇宙萬物が一大

勢力の發現であることである。常識の眼を以て靜かに此の宇宙萬物を見る時、そこに不斷に活動しつゝある一大神秘力を誰か無視し得よう。宇宙の構造、天體の運行、生物の活動、光、熱、滋氣、電氣、空氣、水、何れか神秘なる力の發現ならぬがあらう。輓近の科學的研究に於ても、ラヂウム、ヘリウム等新元素の發見の結果、宇宙萬象に潛む一大勢力が認められるゝに至つたのである。今まで物質の極微分子と見られたる原子（アトム）は無數の電子（エレクトロン）より成立するものであつて、一原子は電子てふ遊星を以て組織せらるゝ一小太陽系であることが解つた。各電子は絶えざる大活動をなして居る。枯死せる如く見ゆる物質の中に限なき大活動があるのである。宇宙に充つるエーテルの旋回運動—これが原子を造り、原子が集つて物體となる。之を要するに物質を以て宇宙的大勢力の表現と見る外に說明の法はないのである。エネルギーについて云へば、熱、光、電氣等が別々の力でなくて、凡て一大勢力の異なれる發表

と見らるゝに至つた。生命について云へば、生物の基礎たる細胞の異常なる力が認められるゝに至り、生命の神秘不可思議はます〳〵人心を蕩揺させた。生物も無生物も共に神秘なる宇宙的勢力の發現と見る外はない事となつた。又生物の心的活動、其不思議なる作用、殊に人心の靈妙奥秘なる活動は、之を或大なる神秘力に源泉を置くものと見る外はないのである。かくの如くにして近代科學は、宇宙に内在する一大神秘力を萬物の根原として見るに至つたのである。

右の如く宇宙に漲る大勢力を認る時、我等はこれを呼んで神となさゝるを得ないのである。宇宙萬象を神の發現と見るを汎神論と批難するは當らない。汎神論は萬有卽神を信ずるものである。然るに我等は萬有を神の全部と見るのではない。宇宙萬物を神の表現と見るのである。絶大なる神力の體現（有形的發現）と見るのである。此意味に於て神を造物主と呼ぶことが出來よう。又宇宙を神の所作となすことも出來よう。要は宇宙に漲る神秘なる力としての神を認ることである。

もろ〳〵の天は神の榮光をあらはし
大空はその御手のわざを示す（詩十九篇一節）

ことを悟るのである。

余は第三に余が内心に照らして神の存在を信じ得た。我に理性てふものがある。この理性は萬事萬物を合理的に判斷し、理解し、苟も理性の認諾せざるものは之を誤れりとして棄てんとする。取捨選擇の一大權威者として理性てふ不可思議力を我内心に感ずる時、余はこの理性の賦與者としての神を認めざらんとするも得ないのである。獨の神學者ヤコビイは曰ふた。

To know God and to possess reason are one and the same thing, just as not to

know God and be a brute are the same thing.

神を知ると理性を持つとは同一事なり、而して神を知らざると獣たるとは同一事なり。

と。蓋し、理性は神の與へしもの、理性の存在を信ずるものは神の存在をも信ずべきである、神を否むは我に理性のあるを否みて我を獣とするに等しと云ふ意であらう。まことに至言と云ふべきである。

わが内心に道義的良心のあるも亦神の存在の一證である。げに奇しきは此良心てふものである。利を棄てゝ義に就き、身を殺しても仁をなさんとする。義を枉げて利に就き、仁をなさずして身を全うしたる時、我は無限の墮落を内心に於て感ずる。悪の榮えて已まぬ此汚れたる世にありて、善の不利なるを知りつゝも善を行はざれば我心は安んじない。悪を行ふものは怖れつゝ行ひ、不義を行ふものは恥ぢつゝ行

ふ。此世以外の勢力にして人心に加はり居らずば、萬人私利と慾望の追求に從ひて心安き筈である。されば、此世の利害得失に關せざる道義心が人心の奥底に存するは、之が起原を神に置く外は説明の途はない。我高貴なる道義的良心、肉の犧牲を拂ひても尚仁義の遂行に醉はんとの此心、余はその起因を此世に置かずして神に置くものである。

わが内心の宗教的憧憬も亦神の存在の一證である。この人類特有の情感、この神を戀ひ求むる深大なる哀叫、神を發見せずしては充たし得られぬ哀心の缺陥の自覺、神の見えざるや木石禽獣を拜してまでも心の缺陥を滿たさんとする人間の欲求―これこそは人類が其本然に歸らんとする情懐と努力にして、まことに神の存在を推定せしむるものである。アレグザンドリアの碩學フィロの斷せし通り「神の觀念を有せざる程に蒙昧なる人は地上にない」のである。然り宗教心は萬人の有する處であ

る。而して宗教心とは神を求むる心である。故に若し神にして存在せぬならば、人類共通の心的希求を以て唯虚妄を逐ひ求むるものと見ねばならぬのである。されば羅馬の賢哲シセロは喝破した。

He who possess this knowledge is a man, and he who is destitute of it is no man.

神の知識を有するものは人なり、之を缺くものは人に非ず

と。人が人たるは神在るに基くとは寔に深き内容を有する断定である。

米のクェーカー詩人ホイッチヤアは歌ふた。

His witness is within.

神の存在の證據は内心にあり

と。また彼は

To the still witness in my heart.

わが心の靜かなる證明に

立ち歸りて神を見出したる自己の經驗を語つてゐる。吾人の内心を靜かに探る時、吾人はそこに神の存在の囁きを聞き得るのである。

余は第四に我を指導し我に信仰を與へしものとしての神を認め得た。余が初て聖書を讀み出してより既に多くの歳月を經た。其間余は信念の確立せぬため懐疑の悪鬼に襲はれて、此教を棄てんとせしこと幾度なりしかを知らない。或時の如くは聖書を見ざる數ヶ月に及び、其間全然不信の生活を送つた。余がかく岐路に外れしこと再三再四に止まらざりしにも係らず、其度毎に余は間もなくして本道に立つ自己を見出した。余は惡夢より醒めし人の如く其處に立つ己れを不思議と眺めた。余は見えざる大なる聖手が我を導き我を支へ來りしを感せざるを得ない。そして多難危

峭の心靈的生活の後、今や辛うじて光明の一端に觸れ、イエスキリストを生命の主と仰ぎて心に安心の萠芽きざせしもの、これ實に低劣怠慢なる余の生み出せし處ではない。まことに是れ「其日を善き者にも惡き者にも照らし、雨を正しき者にも正しからざる者にも降らせ給」ふ天父の聖手、我心靈深く下れる結果に相違ない。パウロは曰ふた。

○汝等の信ずるは神の大なる能の活動に由るなり（以弗所書一章十九節）

と。又彼は曰ふた。

○なんぢら惠に由りて救を得……己に由るにあらず神の賜なり、行に由るに非ず

（同二章八節）

と。我生の指導者、保護者として、又信仰の賦與者として余は大能者の存在を信ずるものである。

以上の如く或は信仰の上に立つ推理より、或は現代科學の結論より、或は內心の一般的經驗より、或は內心の特殊的經驗より、余は神の存在を認るに至つたのである。之等四個の根據は決して有神論の論證として揭げた者ではない。これ皆余が神の存在を認るに至りし心的根據の實記である。余は理論の上に有神論を說かんと欲する者ではない。かくの如きは神學者が机上の末技に過ぎぬ。余はたゞ神の存在を認るに至りし我心的經過を分析して茲に公表するのみである。神學者をして其「人格的一神論」を主張せしめよ。理論の上に神を規定するを厭ふて、全性に於て之を實感せんと願ふ余は、詩人の叫びに應ずるものである。

あゝ神よ、汝は我神なり、われ切に汝をたづね求む。
水なき乾きおとろへたる地にある如く、

我靈魂は汝を慕ひ、わが肉體は汝を戀ふ。
さきにも我れ斯くの如く大權と榮光を見んことをねがひ
聖所にありて目を汝より離れしめざりき。
汝の仁慈は命にもまされる故に
わが唇は汝をほめまつらん。
かく我れは我生くる間汝を祝はん、
聖名によりて我手をあげん。
われ床にありて汝をおもひ出で
夜の更くるまゝに汝を深く思はん時、
わが靈魂は髓と脂とにて饗さるゝ如く飽くことを得、
わが口は喜びの唇をもて汝を讃めたゝへん。

そは汝わが助となりたまひたれば
我れ汝の翼のかげに入りて喜びたのしまん。
わが靈魂は汝を慕ひ追ふ。
汝の右の聖手はわれを支ふるなり（詩篇六十三篇）。

一三、神の顯現

以上のごとくにして余は神の存在を認め得た。四方面より神を學びし余は今や神なき宇宙を想像することは出來なくなつた。然らば我等はこれを以て滿足する事が出來ようか。否々、我等は神の存在の認識を以て滿足することは出來ぬ。更に進んでその神の屬性を知らねばならぬ。其神に交はるの道を學ばねばならぬ。「汝(神)の中に安止するまでは我心情は不安なり」とオーガスチンは云ふた。寔に斯の如くならずしては確信ある眞個の生活に入ることは出來ぬ。而して之がためには神が或形を以て其姿を現はさんことを人は要求する。神の顯現—これぞ萬人の切なる要求である。或形を以て神の顯現せらるゝ時、吾人は初て此神の屬性を知ることを得る、又此神と交はることを得る。されば聖き一神教を奉じ居りしイスラエル人も、この

神の明確なる顯現なきため、屢々偶像的迷信に落ちた。これ神の有形的顯現を希求する人間共通の感情の發現である。亦彼等が神を信ずるのみにて滿足せずして、預言者の先導の下に救主の出現を期待したるも、これ同一なる心情の發露である。

宇宙萬物は神の顯現である。これに神の全能と愛と義とを知ることが出來る。輝く萬象は神の光明の反射である。又人心は或意味に於て神の顯現である。「神その像の如くに人を創造り給へり」(創世記二章廿七節)とは意味深き語である。人心の靈妙なる活動と道義的良心の根深きとは、正しく神靈の反射である。露の文豪ドストイエフスキイが如何なる醜汚頽廢の人を描くも必ずそこに心的靈能の潛在を認めたるは、此事を知れるためであつた。まことに人心は水が天空を映すが如きものである。如何に小なる豬水と雖も之に蒼天を宿すが如く、いかに小なる人心にも神の姿を宿さぬはない。然しながら萬象も人心も決して神の完全なる顯現ではない。之

に暗黒と惡と罪との混在を否認することは出來ぬ。されば我等は之以外に神の完き顯現を探さねばならぬのである。

又世に「光の證明者」なるものがある。彼等は萬象と人心とに現はるゝ神を認る少數者である。詩人は路傍の薔薇花に神を知り、巖上の櫻草に神愛を學ぶ。孔子は天の命としての道義の絶對價値を知り得た。ゾロアスタは宇宙を善惡の爭鬪場と見て、善に與して惡と戰ふべき人の責務を悟り得た。エピクテタスは神に默從するを最高の生活として認め得た。法然は彌陀の本願に絶對他力の安住を發見し得た。彼等はパプテスマのヨハネと等しく「光明の證明者」である。彼等は「光に非ず、光に就きて證をなさんために來た」のである。「光に就きて證をなし凡ての人をして己に因りて信せしめんがため」に來たのである。彼等光明の證明者は人間界の寶である。「光は暗に照り暗は之を悟らざ」るに、彼等少數者は能く之を認めて、種々

の困難と恥辱に屈せずして之を此世に證明した。多くはそれがために苛酷なる迫害を受け、或者は殉教の死をさへ遂げた。而して彼等少數者に教べられて光明の一端に觸れ、ために靈活歡喜の生涯を送り得し人は、もとより其數少しとしない。彼等は人類の開導者である。我等人類は多大の感謝を彼等先覺者に献ぐべきである。然しながら彼等は光の證明者であつて、光其ものではない、眞の光ではない。我等は彼等の外に眞の光を求めねばならぬ、神の全き顯現を探さねばならぬ。

而して余は遂にかくの如き神の顯現としてイエスキリトを認むるに至つたのである。云ふまでもなく彼は完全なる人であつて、其人格と生涯と信仰とに於て人としての模範を示した。眞人の道を示した。しかし問題は茲に盡きない。彼の至美なる教訓と至聖なる人格と至高なる生涯と、まことに是れ一の奇跡である。かの大祭務

をして「愛の上に立てたる帝國」と羨望せしめたる其死後の感化に至りては、たゞ驚歎讃美の外はない。而して其「現存のキリスト」として多くの信者の心に神の如く臨むは、之を奇跡中の奇跡と稱する外はない。かくてキリストを神の全き顯現と見るも誰か不合理と評し得よう。イエスに此自覺ありしは有名なる事實である。約翰傳に記さるゝ彼の語が悉く此自證たるは誰人も認る處である。「我と父とは一なり」(十章三十節)と云ひ「我を見し者は父を見しなり」(十四章九節)と云ふ。其他すべて此類である。約翰傳を疑ふ人は、宜しく共觀福音書に赴きて彼が神子の自覺の豐かなるを知るべきである。ペテロが「汝はキリスト、活ける神の子なり」と云ひしを彼は嘉納し給ふた(馬太傳十六章十三節—十七節、馬可傳八章廿七節—三十節、路加傳九章十八節—廿一節)。彼は己れに人の罪を赦す權能のあることを自認して居た(馬太傳九章六節等)。彼は王の尊稱を受けて畏れず、パリサイ人の之を難

ずるや「この輩もし默りなば石叫ぶべし」と云ふた(路加傳十九章三十七節—四十節)。「汝キリスト神の子なるか」との祭司長の質問に對して、彼は「汝が言へるごとし」と答へた(馬太傳二十六章六十四節、馬可傳十四章六十二節)。其他一々揭げ難い。イエスを救主として之に全心の信賴をさゝげつゝ、其自證をのみ斥くるは、信仰に於ても理性に於ても堪へがたき處である。

「神子」と云ひ「神の獨子」と云ふは此世の言葉を用ひて天上のことを說明せしものである。一の便利なる說明の語である。神自身が人間の如く子を有するのではない。神の最高顯現の意である。イエスキリストは神の最高顯現である。けれども神自身ではない。神が自ら此世に降つて人の形を取つて現はれたのではない。神の顯現の最高なるものである。故に神と呼ばずして神の獨子と云ふ。まことに合法なる名稱である。然りイエスキリストは神の最高顯現であつて神の本體ではない。故に

神はイエスキリストに於て、人の中に現れ得べき最大限の顯現をなしたのである。絶大神秘なる神と其屬性とはイエスキリストの中に悉く現はれ得べきでないかも知れぬ。しかし少なくともイエスは人としての神の最高顯現である。これ吾人の信仰と理性と常識の判定する處である。

イエスは既に神の最高顯現である。故に彼の教訓は神の聖旨を傳ふるものである。彼の人格と生涯に表はるゝ特性は神自身の屬性を語るものである。神の義と愛とを示すものである。イエスの全性が神の人類に現はれし姿である。愛に充ち恩恵に溢るゝイエス、迷へる靈魂を救はんとして自己を棄つるイエス、弱き者惱める者の友たるイエス、我等の悲痛を慰め傷を醫やし恐怖を遂ひやるイエス、至聖至愛なる彼れ、凡そイエスてふ名と共に我等の思ひ浮ぶる一大人格—これ實に神の姿そのまゝである、神の最高なる顯現である。

未だ神を見し人あらず、たゞ生み給へる獨子即ち父の懷にある者のみ之れを彰せり(約翰傳一章十八節)

とは實に偉大なる眞理の道破である。我等は神の存在を知ることが出來る。然しながら神の明確なる姿を見ることは出來ぬ。神の屬性を知ることは出來ぬ。そして之を我等に示して、しかも言葉を以てのみならず形を以て之を示して、この痛切なる人類の要求を充たしたるはナザレの人イエスキリストである。「神の充ち足れる德は悉く形をなしてキリストに住めり」(哥羅西書二章九節)と云ひ、又「彼は人の見ることを得ざる神の形」(同一章十五節)なりと云ふ。げに至言と云ふべきである。

かく神が顯現せられて我等は初て神と交はることが出來る。即ち我等はキリストを通して神と交はるのである。恰も光線を通して太陽の力に浴するが如くである。キリストは神の顯現である。神の代表者である。故に聖書に於て彼の聖語を味ひ彼

の人格に觸るゝも（間接靈化）亦神の一端と交はる所以である。進んで現存のキリストを心に宿して、其命を行ひ其助けを受け其慰藉を蒙るは（直接靈化）、更に確實に神と交はることである。抑も我等は神と交はりて初て力を得る。神と交はる途にして示されずば幾百の有神論も無用の贅物である。されば、キリストを通して神と交はるを得るに至つて我等は初て不動の巖に立つのである。

想ひ起すはイエス最後の遺訓である。トマスの質問（約翰傳十四章五節）に對して先づイエスは答へた。

我は途なり、眞なり、生命なり、人もし我に由らざれば父のもとに往くこと能はず。もし汝等我を知らば我父をも識るべし。今より汝等かれを識るなり、既に汝等かれを見たり

と。卽ちイエスを通して初て神と交り得ること、及びイエスに神の完全に顯現せること—此重要なる二大根本眞理を彼は自ら敎へたのである。ピリポこれを悟らずして、「我等に父を現はし給へ、さらば足れり」と、人類の最深なる希求を以て、哀號せる人類を代表して師に迫るや、師は嗟嘆しつゝも諄々として尙ほ說いた。

ピリポ、われ斯く久しく汝等と共に居りしに未だ我を識らざるか。我を見し者は父を見しなり、何ぞ父を我等に現はせと言ふや。われ父に居り父の我に居ることを信せざるか。……我は父に居り父は我に居ると我が告げし言を信せよ

と。これぞ實に人類が根本問題の完全なる解決である。さればこそイエスは開口第一に「汝等心に憂ふること勿れ、神を信ずべし、また我を信ずべし」と先づ說いたのであつた。

ルウテルは斷じた「我等は神を有ゆる處に求める、しかしキリストの中に彼を見出さずしては何處にも彼を見出すことは出來ぬ」と。我等は之が彼の深き經驗より

出でし語なるを思ふ。いでや詩聖ブラウニングと共に歌はふ。

I say the acknowledgment of God in Christ,
Accepted by reason, solves for thee
All questions in the earth and out of it.

余は曰ふ、キリストの中に神を認むることは、
理性によりて承け入れられて、汝のために
世界の凡ての問題を解くと。

あゝナザレの田舎青年イエスに神は其最高顯現をなしたりと云ふ。あゝ果して然るか。餘りに不可思議にして信じがたき程である。されど「是れ信ずべく、又疑はずして納くべき談」である。王者の家に生れて八十有餘の高齢を極め、萬民哀惜の

中に大往生を遂げたる釋迦にあらず、又三千の弟子を貯へて德流一世を蔽ひたる孔子にあらずして、辱められ罵られ鞭たれ唾せられて、屈辱の中に無殘の死を遂げたる死刑囚イエスに、神はその最高顯現をなしたのである。

工師の棄てたる石は
すみの首石となれり。

これエホバの成し給へる事にして、
われ等の目に奇しとする處なり(詩百十八篇廿二節、廿三節)。

と詩人の歌ひし通りである。あゝ其外形より見て驚くべく奇しむべき此事——一度心眼を開いて事の內眞を究めんか、これ事實を事實として信ずることである。これ我全性に於て些の不合理なく受け得る事である。

紀元二十九年の冬、使命を終へて歸り來たりし七十人の弟子に、イエスの語り給

ひし語を聞け。

イエス弟子を顧みて竊かに曰ひけるは、汝等が見る所のことを見る其目は幸なり。我汝等に告げん、多くの預言者及び王も汝等が聞く所の事を聞かんとせしかども聞かざりき(路加傳十六章廿三節、廿四節)。

あゝモーセ、エリヤ、ダビデ、イザヤ、エレミヤの徒等、彼等は神に仕ふるに熱誠と切實とを以てしたれども、神の姿明確ならずして、徒らに哀求多く感謝少なかつた。彼等の痛切に願ひし處はメシヤの出現であつた。神子の降臨であつた。彼等は神が地上に其姿を顯はし給ふ時、天上天下凡ての問題の解決せらるゝを知つて、偏に之を待ち望んだ。彼等の希望はたゞ此一點にあつた。しかし彼等は「見んとせしかども見ず……聞かんとせしかども聞かず」なかつた。偉大義烈なる彼等に比して汚劣緩怠なる我等、たゝ後代に生れしめために、彼等の見んと願ひて見ざりし處を見、

彼等の聞かんと欲して聞かざりし處を聞くを得る。まことに「汝等が見る所の事を見る其目は幸なり」である、あゝ我等何の辭を以てか此幸福を感謝すべき。

見んと願ひし神の姿は見ざりしも、彼等は稀世の偉人なれば、深く彼を信じて不信の世に神の聲を深く傳へ得た。さりながら偉人と偉人に從ふ少數者を除きては、民は皆見えぬ神を信じ得ずして見ゆる神に賴らんとした。「汝我面の前に我の外何物をも神とすべからず」との十誡の第一條も物の數かはと、彼等は屢々バアルに仕へ、アシラを拜し、偶像を鑄造りて之を祭つた。目に見ゆる神は目に見えぬ神より近くして明確である。彼等が見えぬエホバ神よりも見ゆる偶像に仕へしは、陋は即ち陋なりと雖も、茲に人情自然の聲を聞くの感に堪へぬ。罪に眼くらめる人類は見えぬ神を見えぬまゝにて拜せんには、餘りに靈力に於て乏しい。されば自ら形ある ものを神として拜せんとする。茲に偶像崇拜が生れる。さりながら偶像は彼の眞正

なる形ではない。我等人類は彼の眞正なる形を得て初て滿足するのである。唯の神は茫漠神秘にして捕捉しがたい。偶像は低卑にして拜するに足らぬ。神の姿の現はれんこと—彼の最聖最高なる顯現のあらんこと—これ凡ての人類の最大最深の要求である。有意識的又は無意識的の要求である。而して之を充たせしものはイエスキリストである。彼こそ彼の最聖最高なる顯現である。これぞ「天及び地及び地の下及び海の上にある所の、凡て造られたるもの又其中にあるもの」（默示錄五章十三節）の仰いで以て拜すべき神の姿の現示である。

あゝ我切愛する東洋の日本と其民！　汝は長い間闇黑の中に哭いてゐた。汝は其本具する光の微弱なるため他國より眞光明を携へ來らんとした。儒敎は支那より、佛敎は印度より來た。然しながら兩者とも眞の光明ではなかつた。後者は或は眞光

明に近からんも、傳へし者は之を偶像化して汝に示した。汝は偶像としても之を受けた。ために二千有餘年汝は各種の偶像に圍繞せられて終つた。見よ汝を圍む偶像の如何に多數なるよ！　汝は偶像と墓石との間に坐する民である。さりながら、キリストてふ眞光明に接せざりしため、偶像を拜して僅かに本然の希欲を滿足せし汝は、眞光明を有しながら千九百年間之を偶像化し來りし歐洲の白皙人種（其少數なる例外者を除く）に勝ること萬々である。汝の中には眞信仰の樣式と眞生活の實形に於て偉なりし多くの名僧偉人が生れた。汝は其本來に於て決して小なる民ではない。然しながら眞光明は未だ其眞なる形に於て汝に來らなかつた。歐米人の齎らせしイエスキリストは多くは僞のイエスキリストである。汝は彼等に欺かれてはならぬ。汝は汝自身この眞光明を探りて之を其純粹なる形に於て受け納れねばならぬ。かくして初て不動に立ち永遠に築くことが出來る。汝の中に二十萬のキリスト信者

ありと稱するも、其多くは歐米の墮落せる基督敎そのまゝを受け入れし輩である。彼等は歐米人の奴隷にして不信者に劣るの徒である。汝の中に彼等のあるは決して汝の名譽でない。汝はイエスキリストに因りて來る醇眞の生命を受けねばならぬ。汝は眞の光明をイエスキリストの中に求めねばならぬ。然る後汝は初て偉大なる民となるであらう。然るに汝は今此事を棄てゝ、墮落せる歐米の軍國主義と文藝哲學と實業工藝とに其全精力を獻げてゐる。あゝ早く醒めよ我愛する國と民！

一四、神との交通

右の如くにして「神の最高顯現」としてのキリストを知りたる余は、更に「聖靈とは何か」てふ問題に觸れた。神とキリストの關係を知りても聖靈の如何を知らずしては、余が此探究は未了なりと云はねばならぬ。されば余は之を明かにせんと欲して、自己の經驗を探り自己の理性に訴へて、考察し又考察した。

聖靈についての我等の先入觀念は、異常である、非常である、熱狂である。聖靈は或時期に或非常なる力を以て人に臨み、此時人は己を忘れて恍惚無我の狀態に入り、眼血走り顏かゝやき、靈力全心に溢れて熱狂の態を現し、異常の行を爲すものであるとは、往々にして人の信ずる處である。されば

ペンテコステの日に至りて弟子たち皆心を合せて一處に在りしに俄に天より迅

風の如き響ありて彼等が坐する處の室に充てり。焔の如きもの現はれて岐れて彼等各人の上に止まる。こゝに於て彼等は皆聖靈に滿たされ、其聖靈の言はしむるに從ひて異なる諸國の語を言ひ始めたり。……皆（傍觀者）驚き訝りて互に曰ひけるは此は如何なる故ぞやと。或は嘲りて此人々は甘き葡萄酒に滿たされたる者なりと云へり（使徒行傳第二章）。

とあるは最も代表的なる聖靈降下の記事とせられてゐる。之を舊約聖書に於て見るもモーセがシナイ山に聖靈に接するや「雷と電光及び密雲山の上にあり、又喇叭の聲ありて甚だ高かり、營にある民皆震ふ……シナイ山すべて煙を出せり……その煙竈の煙のごとく立ちのぼり山すべて震ふ」の狀にあつた（出埃及記二十章）。士師ギデオンに神の靈臨むやミデアンの兵は慶殺せられ、サムソン神の靈を受けて異常なる怪力を現した。預言者エリヤはカルメル山上に神の靈を受けて、祈禱を以て火

なくして薪を燃やし、キション河畔にバアルの預言者四百五十人を亡ぼした。聖靈感受の狀況と其結果とは凡てかくの如くなりと思はれてゐる。神秘、驚異、奇跡、神怪、大感激、大行爲、これ聖靈降下に伴ふ特徴であると。聖靈に關する人の先入觀念は概ねかくの如くである。

されば信者にして此種の聖靈降下を希ふもの多きは怪しむに足らぬ。又世に信仰興起者とて、民衆の上に此種の聖靈降下を誘起すと稱せらるゝ一種の宗教家あるも、亦怪しむに足らぬ。チョオジ・フォックス、ジョン・ウェスレイの如きも半ば此種の宗教家であつた。彼等は一時に數千人の信仰を燃えしめた。米のムーデー、ジプシー・スミス、近くはビル・サンデーの如き、聖靈に燃えて熱狂的傳道をなし、數萬の聽衆に忘我的感激を與へて信仰復興をなせしと曰はれる。求むるものも與ふるものも、聖靈の降下を一時的、異常的、狂熱的、外現的に思へる點に於て一致してゐる。

余も亦曾て此意味に於て聖靈を喚び求めし一人であつた。聖書を讀むと二三年、基督敎的生活に入りてより一二年にして、自己の靈的無力に苦みたる余は、必竟これ聖靈に接せざる爲なりと推斷した。かくて余は「聖靈よ來り給へ！　聖靈よ來り給へ！」と朝に夕に喚び求めた。想ひ起す、旭日未だ出でずして東天紅に燃ゆる時、希望の調高き雞の聲を聞きつゝ、たゞ獨り寂しき森に入りて、余は幾度か此一つの願事を以て神に迫つたことであらう。又想ひ起す、夕陽富士ヶ峰にかゝりて天と地と共に燃ゆる時、天國の光輝を忍びつゝ、たゞ獨り丘に佇立して、余は幾度か聖靈の降下を泣いて祈つたことであらう。しかしながら神はペンテコステの日の幸福を余に賜はらなかつた。或時は聖靈の來り臨むてふ集會に出でゝ、敎師は泣き叫んで聖靈の降下を祈り會衆の多くは天の靈火に燃ゆる如くなるを實見しつゝも、我靈は燃えず我目に涙は出でずして、喧騷の聲に圍まれつゝ、我心は沈衰と不快とに滿た

さるゝのみなるを經驗した。又或時は聖靈感受の經驗なきを或青年牧師に詰られ、かくの如くは地獄に落つる外なしと曰はれて、落膽哀愁の中に幾日かを送つたこともあつた。祈りたれど、泣きたれど、叫びたれど、悲みたれど、遂に聖靈降下の嬉しき經驗を持つことは出來なかつた。

以上の如きは聖靈に關する先入觀念であつて、世に此意味に於て聖靈を求むる人が甚だ多い。併しながら我等は更に考ふる處あらねばならぬ。抑も聖靈とは何であらうか。學者的解釋は暫く措き、常識を以て之を判斷するに、神より人に臨む靈氣を指したものと思はれる。人と人が相交はるには其精神の働き掛けし方面を以てする。精神の働きかけが人と我との交涉である。かくの如く神が人に働きかけることなくしては神と人の間に交通は成立せぬ。此働きかけが聖靈である。神の人に向つて働きかける方面が聖靈である。故に聖靈とは神と人との交通點である。之を以て

神は人を導き人は神に交はるのである。かく聖靈が神人間の交通點であるとならば之は宗教問題の中心點と云ふべきである。何となれば宗教とは要するに人が神に交はることであるからである。さすれば我等は此問題について深き考を察せねばならぬ。

初めに心附くことは、聖靈とは神人間の交通物である以上は、それが必ずしも一時的、異常的、狂熱的、外現的なるを要せぬことである。それが恒久的、沈靜的、内心的であつても何等聖靈の聖靈たる所以を妨げぬわけである。否、我等が神と交はるは、一時的にして異常強烈ならんよりは、むしろ恒久的にして靜謐深沈ならんことを求むる。是れ我等は不斷の靈糧を要するからである。至大なる靈感に觸るゝ時、人は手を振り足を動かして踊り狂はんよりは、寧ろ深沈靜肅なる默想と歡喜に入るものではなかろうか。ペンテコステの日に於ける聖靈感受の不健全なりしは其

結果によりて知ることが出來る。信仰復興の忽ち醒むるものにして、其利少くして其害むしろ多きは人の知る處である。ホレブの山に荊を燃やす焔ならで、シロアムの泉の永久に湧きて旅人の飢を醫すものを我等は求める。カルメル山上に異敎を亡ぼす怪火ならで、流れて盡きせぬキションの流の旅客の目を慰むるものを我等は求むる。異常と熱狂と外現と、時に必要なることもあらう。併しながら、我等は内心の奥底に言ひ難き沈靜の靈感を請ひ求むるものである。

聖靈は神の靈である。人に向つて働きかける神の靈である。故に或意味に於て萬人が聖靈を受けてゐるのである。如何なる人にも道義の心あり、正に就き善を行ふ心あるは、たとへ微かなりとも聖靈の萬人に臨み居る證左である。殊に品性高く心志廉潔なる人は、ヨリ多く聖靈を受けて居るのである。就中靈界の偉人等—釋迦、

孔子は曰はずもがな、モーセ、イザヤ、ソクラテス、エピクテタス、スピノーザ、法然、親鸞の徒―は殊に多く聖靈に接せしものである。かくの如くにして神と交はるを以て基督信者の特權とのみせざる我等は、聖靈を以て基督信者の特有物とのみは思はぬ。さりながら之は聖靈を廣義に解せし場合である。もしそれ之を狹義に解して聖書特有の意味を以てせんか、聖靈とは神より出でゝイエスキリストを通して信者に臨むものたるに外ならぬのである。

聖靈とはキリストを通して（*through* Christ）又キリストに在りて（*in* Christ）我等の心靈に感受する神の靈である。イエスは聖靈に充ちてゐる。我等がイエスより靈化を受くるは彼の中に充つる聖靈を感受せしことである。殊に「現存のキリスト」を信じて其不可思議なる靈化を直接に感受するや、我等は聖靈をその醇眞なる形において受けたのである。而してキリストより受くる聖靈は、これ神より出でゝキリスト

トを通して吾人に臨めるものたるや明かである。吾人に安心を與へ、信賴を起し、犧牲の精神と愛の心を促し、神に全心全靈を献ぐるの態度を誘起し、信仰より出でたる仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、温柔、樽節等の果を結ばしむるもの―これ即ち聖靈である。要するに吾人に對する神の凡ての靈動、吾人をして基督敎的生活を事實に營ましむるだけの靈化、靈感、靈激を與ふるもの―これを聖靈と名づくるのである。

パウロは斯のごとき意味に聖靈を解した。

もし神の靈汝等に住まば汝等は肉に居らで靈に居らん。凡そキリストの靈なきものはキリストに屬かざるものなり。もしキリスト汝等に居らば、肉體は罪に由りて死せるも、靈魂は義によりて生きん。もしイエスを死より甦らしゝ者の靈汝等に住まば、キリストイエスを死より甦らしゝ者は、汝等に住む處の彼の

靈を以て汝等が死ぬべき身體をも生かすべし（羅馬書八章）。

卽ち聖靈とは我等を靈的生活に入らしむるものである。我等をキリストに屬かしむるものである。我等の靈魂を生かすものである。更にパウロの語を聞かう。死すべき我等の身體を活かすものである。

凡そ神の靈に導かるゝ者は是れ卽ち「神の子」なり。汝等が受けし靈は奴僕たる者の如く恐怖を抱く靈にあらず、アバ父と呼ぶ子たるものゝ靈なり。聖靈みづから我等の靈と共に我等が「神の子」たるを證す。我等もし子たらば又「後嗣」たらん、卽ち神の「後嗣」にして、キリストと共に「後嗣」たる者なり（羅馬書八章）。

卽ち聖靈とは我等が神の子にして、永生を嗣ぐ者なりとの確信を我等に抱かしむるものである。又パウロは曰ふた。

聖靈も亦我等の弱きを助く。我等は何を祈るべきかを知らざれども、聖靈みづから言ひがたきの歎きをもて我等のために執成をなす。人の心を見透し給ふものは聖靈の意をも知れり。そは聖靈は神の心に從ひて信徒のために執成をなせばなり（羅馬書八章）。

卽ち聖靈は我等を助け我等のために執成をなすものである。かくの如くに解し來る時、聖靈がイエスキリストを通して我等の感ずる神の靈たること云ふまでもない。何となれば以上の如き心的現象は、皆イエスキリストに在りて我等の實感する處であるからである。

イエスが約束せし聖靈は疑ひもなく右の如き意味のものであつた。

われ父に求めん、父かならず別に慰むる者（訓慰師、辯護者）を汝等に賜ひて限なく汝等と共に在らしむべし。之は卽ち眞理の靈なり。世之を受くること能

はす、そは之を見ず且知らざるに由る。されど汝等は之を知る、そは彼れ汝等と共に居り且汝等の衷に居ればなり（約翰傳十四章十六節、十七節）。

われ慰むる者（訓慰師、辯護者）を父より遣らん、即ち父より出づる眞理の靈なり。その來る時我ために證をなすべし（約翰傳十五章廿六節）。

われ眞を汝等に告げん、我が往くは汝等の益なり。もし往かずば慰むる者汝等に來らじ。若し我れ往かば彼を汝等に送らん。……彼れ即ち眞理の靈の來らん時汝等を導きて凡ての眞理を知らしむべし（約翰傳十六七節十三節）。

即ち聖靈の第一特色はそれが我等を慰め我等を辯護することである。我等のために執成をなすことである。聖靈の第二特色はそれが眞理を我等に教ふることである。「罪につき義につき審判につき」我等を教ふることである。神につきキリストにつき人間の踏むべき道につき、凡そ我等の知らねばならぬ道理を我等に教ふることである。

ある。要するに吾人をして信仰的生活を送らしむるものが聖靈である。かくてパウロの聖靈觀と一致するのである。

此聖靈が此約束の如く今我等の心靈に臨めることは我等の經驗する處である。而して其我等の心靈に臨むや、常に「現存のキリスト」を通してゐある。さればパウロは之を「キリストの靈」と名づけ（羅馬書八章九節）、イエス自身は

わが名に由りて父の遣はさんとする慰むる者即ち聖靈は凡ての事を汝等に教へ且わが汝等に言ひしことを凡て想ひ出さしむべし（約翰傳十四章廿六節）。

と云ふた。キリストの名に由りて來るものである、キリストを通して來る者である。卑近なる例を以てせば神は太陽にして、キリストは空氣、聖靈は光線の如きものである。太陽の光熱は空氣を通して光線によりて吾人に臨む。その如く我等はキリストを通して來る聖靈をキリストにありて感ずる。キリストに溢るゝ聖靈を我等が感ず

るはこれ神と交はる所以である。更に尚ほ卑近なる比喩を以て、もし神を發電機とし、我等を電燈とするならば、キリストは此兩者を連結する電線である、そして聖靈は正に電力である。電力が發電機より出で、電線を通りて電燈に臨む時。それは初て發光する。聖靈が神より出でゝキリストを通りて我等に臨む時、我等の心靈は初て光に燃ゆるのである。

かくの如くにして我等は、イエスの遺し給ひし葡萄樹の比喩の眞意を味ひ得るのである。

我は眞の葡萄の樹、我父は農夫なり。我に在りて凡て實を結ばざる枝は父これを剪除り、すべて實を結ぶ枝は之を潔む、そは益々繁く實を結ばしめんためなり。……汝等われに居れ、さらば我れ亦汝等に居らん。枝もし葡萄の樹に連らざれば自ら實を結ぶこと能はず、汝等も我に連らざれば亦かくの如くならん。我は葡萄の樹、汝等はその枝なり、人もし我に居り我れ亦かれに居らば多くの實を結ぶべし（約翰傳十五章）。

葡萄樹は生けるキリストである。我等はその枝である。そして聖靈は幹より枝に及ぶ養汁のごときものである。枝なる我等は幹なるキリストに連りて初て此養汁を受けることが出來る、そして結實することが出來る。枝もし幹を離れなば如何にして養汁を受けることが出來よう。我等もしキリストに連らずば如何にして聖靈を豊かに受けることが出來よう。我等はキリストを心に迎へ奉りて、之に連なり之に接し、以て神の大靈を全心に豊かに感受すべきである。かくて我等は益々潔められ益々繁く結實し得るであらう。我等はキリストと共にありて生き、キリストを離れて死するのである。

されば使徒パウロは曰ふた「我小子よ、われ汝等の心にキリストの形成るまでは再び汝等のために産の劬勞をなす」と（加拉太書四章十九節）。又彼は曰ふた「信仰によりてキリストの汝等に宿り給はんことを希ひ奉る」と（以弗所書三章十七節改譯）。そして「汝等堅く主に立つべし」（腓立比書四章一節）と云ふのが彼の重なる信者激勵の語であつた。パウロに似たる北歐の健兒ルウテルは曰ふた。

余はイエスキリストの聲を聞いたことはない、姿を見たことはない。けれども萬人に棄てられし時、最も茫弱なる時、戰慄せる時、死の恐怖に襲はれし時、惡しき世より迫害せられし時、余はイエスキリストてふ名が余に傳ふる神聖なる力を最も深く感じたと。彼はイエスを通して來る聖靈の慰藉を感得したのであつた。

大英國の心靈的革命者オリヴー・クロムエル、多年の辛苦に體勞れ心倦みて死期近く迫れる時、寢室に橫はりて腓立比書第四章を讀んだ。彼は先づ其十一節、十二節を朗讀した。

われ乏しきに由りて之を云ふにあらず、そは我れ如何なる樣に居るもそれを以て足れりとすることを學べばなり。われ貧賤に居るの道を知り、又富に居るの道を知り、飽くことも飢うることも、豐むことも歉きことも、凡ての事に於てわれ之に熟練せり。

之を讀んでクロムエルは叫んだ「パウロよ、汝は之を學び得しも我には之は出來ぬ、あはれなる我よ！」と。しかしながら誦し進んで十三節の

我は我に力を與ふるキリストに因りて凡ての事を爲し得るなり

の語に至るや、彼の信仰は働き出し、彼の心は支持と慰藉を得、彼は獨語して曰ふた「パウロの基督は亦余のキリストなり」と。かくの如くにして彼は救の泉より、

「限りなく渇く事な」くして「湧き出で丶永生に至るべ」き寶水を汲み得たのであつた。あゝイエスキリストに在りて、與へらるゝ聖靈の流のいと爽かにして永世（とは）に盡きざるは、げに不思議にも有難き極みである。かくてこそ詩人の歌もます〳〵確實となるのである。

神は我等の避難所（さけどころ）また力なり、
なやめる時のいと近き助なり。
さればたとひ地は變り
山は海の最中（もなか）にうつるとも我等は恐れじ。
よし其水は鳴りとゞろきて騒ぐとも、
その溢れ來るによりて山はゆるぐとも何かあらん。
……

萬軍のヱホバは我等の友なり
ヤコブの神は我等の高き櫓（やぐら）なり（詩篇四十六篇）。

一五、罪の赦免

キリストてふ仲介者を通し、聖靈てふ交通點に由りて、余は神と交はり得る身となつた。かくて余が心靈的要求は大體に於て充たさるゝに至つた。心の苦悶は其大部分が消え去つた。悲哀は其根原に於て碎かれた。歡喜は徐々として其頭をもたげた。げに神と人と交通の道明かになる時、宗教問題は少くとも其根本に於ては解決されたのである、併しながら全からんために余は尙二問題の解決を要した。一は罪惡問題である。他の一は來世問題である。罪の苦悶と死の恐怖より救はるゝにあらずば、我等の靈的生活は尙不安定なりと云はねばならぬ。

罪の苦悶に至りては余は曾て說く處あつた。これを感せざる人はいざ知らず、之を感せしものは其苦悶の深刻なるに驚かぬはない。そしてその苦悶の深刻なるに驚

く者は、何とかして之に解決を與へねばならぬことを切に感ずる。罪の苦悶は神に近より得ぬことである。汚れし身を以て聖き神の前に出で得ぬことである。又罪に相當する罰を恐るゝことである。されば此の罪の苦悶より脫却するにあらざれば、安んじて神と宇宙とに對することは出來ぬ。

抑も罪とは何であるか。惡念、姦淫、苟合、兇殺、盜竊、貪婪、惡意、詭譎、好色、嫉妬、謗瀆、驕傲、狂妄、仇恨、爭鬪、忿怒等これである。併し之は個々の罪である。もしそれ罪を其本體に於て見んか、これは神を離れて己を求むることである。self-seeking principle（己を求むる主義）である。私利私欲に仕へることである。故に罪より脫せんと欲せば、この神よりの離反の態度を去つて神に歸順せねばならぬ。我父を離れて「遠國へ旅立ちせ」る放蕩兒たる我等は神に歸りて速かに「起つて我父に往」かねばならぬ。自己の意欲を第一の目的物とする時、我等は罪に沈んで

るのである。神への奉仕と信從とを我生活の原理とする時我等は救拯の狀態に入つて居るのである。されば神に仕うるを以て生の第一目的とする時、我等は少くとも其原理に於ては罪の狀態を離れたのである。家を離れて遠く彷徨ひし放蕩息子の父の家に歸つた時、彼は本來の生活に入つたのである。家に歸つた者は旅に彷徨つては居らぬ。神に歸つたものは罪に沈んでは居らぬ。

さりながら尙ほ問題は殘つて居る。我等が父に歸らざる時に犯したる各種の罪は如何。また神に歸りたる後にも犯す各種の罪は如何。神を離れし生活に罪の多きは云はずもがな、神に從ふに至りても誘惑の手に陷りて罪を犯すこと少なくない。神より離反の狀態にある大罪は其根原に於て碎かれしとするも、神に信從の生を營みながらも時に背叛の行爲に出づるを如何にすべき。されば我等の願は古への詩人のそれである。

誰かおのれの過失を知り得んや。
願くは我をかくれたる愆より解き放ちたまへ。
願くは汝の僕をひきとめて故意なる罪を犯さしめず、
それをして我を支配せしめ給ふなかれ。
されば我れ玷なき者となりて、
大なる愆をまぬかるゝを得ん（詩十九篇）。

「玷なき者となれ」らんは我願ながら、これ此世の生涯に於て我が實現し難き處である。徐々たる心靈的進歩はあらんも、全く罪を犯さぬ狀態に至らんことは此世の短き生涯に於て望み得ぬ。又自己に於て如何に犧牲的大行爲に出づるも、過去の我罪業を消滅せしむることは出來ぬ。犯せし罪は既に過去の事實である。いかに難行苦業を以てするも之を消して無きが如くにすることは出來ぬ。されば我等は一面に於ては

益潔くならんと努めつゝ、他面に於ては罪を犯すも赦さるゝてふ信念を得ねばならぬ。「罪の赦免」を信ずるに至らねばならぬ。神に歸りし前と後とに於て犯す凡ての罪を赦さるゝてふ信念を抱かねばならぬ。かくならずしては心の苦悶の取り去らるゝ時はない。

然り我等は「神の赦免」を信せんことを願ふ。「赦免の神」を信せんことを願ふ。そして先づ天然を見る。天然は神の發現である。そこに神の愛の顯現せらるゝや固より其の處である。

謝す、神よ、われもまた、
輝く丘に、ほの暗き林地に、
また夕榮うるはしき海に、
汝のやさしき愛をみとむ。

げに、汝は戯れに、光と恩惠をこの世に充たすにあらじ。
汝は汝の慈顏のかげに
暗く酷き意志を隱すことなし。（ホイッチヤ）

と神の「慈顏」を認るは、罪の苦悶より脫せし人の事である。罪の苦悶に沈める者より見ては、天然は其猛獸と毒蛇と其地震と雷霆と其あらゆる殘酷なる天災とを以て、神の無情と刑罰とを語るが如く見ゆるのである。然しながら天然に「光と恩惠」と神の「赦免」を明確に感知することは出來ぬ。

又人間社會を見るも罪の刑罰は愴に在る。惡き行に惡き病は生れ、空しき悲哀と憤怒は健康を破る。一人の嬰兒のために一家慘苦を嘗め、私慾遑うせられて人と世

に困難は續出する。人間の虚榮と慾望その極に達して、世は淆亂の巷と化し、世界は碧血を以て彩らるゝに至る。茲に神の刑罰を認めざるを得ない。

茲に於てか我等は、「神の赦免」を知らんがために神の最高顯現たるキリストを見ねばならぬ。もし神にして「赦免の神」ならんには、その最高の顯現たるキリストの中に之が現はれてゐるに相違ない。我等はキリスト崇拜者である。彼を以て全宇宙の中心となすものである。故に凡ての問題の解決を彼に仰ぐのである。仰がざるを得ないのである。「七の印にて封印せる裏表に文字ある巻物」を開き得る者は「天にも地にも地の下にも」なきに、「ユダの支派より出でたる獅子ダビデの根」なるキリストのみは「此巻物を開き又この七の封印を解くことを得る」のである（默示錄第五章）。

キリストは神の最高顯現である。人に於て現はれ得べき神の顯現の完全なるものである。されば彼の言、彼が行、彼が人格、悉くこれ神を顯はすものである。神の聖旨と神の屬性とはキリストに於て之を知ることが出來るのである。而して「恩寵と眞理」と愛とにて充てる彼の生と死とを靜かに考察する時、我等はそこに「赦免の神」のいと鮮かに顯はるゝを否定することは出來ぬ。

先づ彼の生を見よ。彼の言と行と人格とが聖愛に溢るゝことは曾て說いた。彼を稱して「赦免の人」と云ふも誰か怪まう。彼は失ひし羊の比喩を語りて「かくの如く一人の罪ある人悔い改めなば、悔い改むるに及ばざる九十九の義人よりは尙ほ天に於て喜あらん」と云ふた（路加傳十五章）。失ひし金子の比喩を述べて「かくの如く一人の罪ある人悔い改めなば神の使の前に喜あるべし」と告げた（路加傳十五章）。放蕩息子の比喩に於て、歸りし子を父の少しも責めざるのみか、至大なる歡待を以

て遇せしことを語りて、神の赦免を暗示した(路加傳十五章)。其他神の招待と赦免を示せし比喩や言辭は少なくない。これ神の聖旨を示せしものと見る外はない。又イエスは罪ある者にして一度悔いて彼を信ずるや、其罪を赦すことを以て常とした。罪なしと自任せる傲慢者流の罪を彼は指摘して嚴責せしも、罪に惱める謙遜れる靈には彼は赦免の恩澤を施して、大なる慰安を與へた。彼は罪人の友であつた。彼は赦免の人であつた。彼の行爲と人格とに脈々たる聖愛恩赦の流れ盡きせぬものがあつた。この至愛なる人格の背後に我等は至愛なる神を見のがすことは出來ぬ。イエスが赦免の人なりしは神が赦免の神なるを示すものである。

その生に於て赦免の人なりしイエスは其死に於て尙更に赦免の人であつた。抑も彼の死は大なる犧牲の死であること前述せし通である。犧牲は愛の至極である。而して愛の至極にして赦免を含まぬ筈はない。更に我等は彼の死の實狀を見る時、そ

こに愛と赦免の迸出豐かなるを知るのである。レバノンの峰よりも高くシロアムの泉よりも清き人格の人なるに、萬民救濟の福音を齎らして來れる救主なるに、世は彼を受けざるのみか、遂に十字架の極刑を以て彼の愛に酬いん、比ひ稀なる侮蔑と屈辱と嘲弄の中に彼は死せんとして、而も一毫敵人と亂民とを怨まなかつた。至極なる愛が至極なる憎惡を以て酬いられて、彼は彼等を怨まざりしのみならず、却て彼等を愛した。彼は終まで愛を以て憎惡に酬いた。

父よ彼等を赦し給へ、その爲す所を知らざるが故なり（路加傳廿三章卅四節）と彼は彼等の罪の赦免を神に祈つた。あゝ我を殺す仇人を赦すこと斯の如く深い。偉大なる「赦免の人」ではないか。共に十字架に掛けられし二人の盜賊の一人、イエスの聖潔と大愛とを認め得て、他の一人の無情の語を戒めつゝ

主よ御國に至り給はん時われを憶へ給へ

と云ふた。イエスは瀕死の苦にありて此信頼の語に接し、直ちに之を嘉納し給ふた。

イエス答へけるは誠に我れ汝に告げん、今日汝われと共に樂園（パラダイス）にあるべし

とある（路加傳廿三章卅九節―四十三節）。罪に汚れし盜賊が臨終（いまは）の際（きは）に悔改の一語を發するや、彼は之を天國に伴ひ行かんと云ひ給ふた。偉大なる「赦免の人」ではないか。かくて彼は其母を弟子に托して後眠つた（約翰傳十九章廿五節―廿七節）。毒杯を傾けつゝ、泣き叫ぶ弟子に從容として靈魂不滅の教を說き聞かせしソクラテスの死は、實に聖人の死であつた。しかしながら「ソクラテスの死にして聖人の死ならば、イエスの死はまさに神の死なり」とは、いみじくも言ひたるかな。大愛と恩赦の寶流、沸々（ふつ〳〵）として彼が十字架より流れ出づるを思ふ。

イエスは神の顯現である。故に彼が生死に於て―殊に其十字架に於て強く―赦免を事實に現はせしは、卽ち神の赦免を實證せしものである。イエスの生死は神の赦

免の實證である。イエスの人格は赦免の神の體現である。かくの如くしてイエスを追して赦免の神を知りたる我等は、一度悔いて還れば神は凡ての罪を赦し給ふことを知りて、初て大安心の境に入るのである。我等は今は罪を恐るゝ要はない。罪の身このまゝ、汚れし身此儘を神に献げまつれば宜いのである。破れ汚れし縷褸（るゐる）を纏へるまゝにして、踴躍して神の御許（みもと）に至り、以て天國の饗筵に與れば宜いのである（馬太傳廿二章十節參照）。かくて穢れし衣も次第に白くなるのである。いざ我等歡喜の翼ひろげつゝ喜び勇んで彼の御許にゆかん。

To Him, from wanderings long and wild,
I come, an over-wearied child,
In cool and shade His peace to find,
Like dew-fall settling on my mind.

ながく荒き彷徨を棄てゝ
労れはてし子供としてわれは彼(神)に歸る。
露のごとく我が心に結ぶ
彼(神)の平和を涼しき木蔭に見出さんとて。(ホイッチヤ)

親鸞上人が「彌陀の本願」を唱へて、彌陀如來は我等衆生を無條件にて招くを其本願とすると説きたるは、正に救免の神を傳へしものであつた。

彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて、往生をば遂ぐるなりと信じて、念佛申さんと思ひ立つ心の起る時、即ち攝取不捨の利益にあづけしめ給ふなり。彌陀の本願には老少善惡の人を選ばれず、只信心を要とすと知るべし。その故は、罪惡深重煩悩熾盛の衆生を助けんが爲の願にてまします。然れば本願を信せんに

は他の善も要に非ず、念佛に勝るべき善なき故に。惡をも恐るべからず、彌陀の本願を妨ぐるほどの惡なきが故に。

これ彼の偉大なる語である。まことに美はしき信仰を逃ぶるに相應しき美はしき語である。併しながら所謂「彌陀の本願」の實證は何れにあるか。惡人をも其儘に赦して招き給ふ阿彌陀佛の本願は、何によりて之を知るか。

親鸞に於ては、たゞ念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、善き人(即ち師の法然上人)の仰せを蒙りて、信ずる外に別の仔細なきなりとの答を聞くに至りては餘りに其茫漠たるを憾みとする。われ等はイエスの全人格と全生死とに神の赦免の實證を見出して、初て赦免の實有を信じ得るのである。然らずしては、我等の罪の餘りに恐ろしき、赦免の聲を聞くも到底之を信じ得ぬのである。

或人は曰ふであらう、罪の赦免の信仰は人を怠慢ならしむるもの、其甚しきに至つては安んじて多くの罪を犯さしむる結果を生むと。併し之は無用の杞憂である。苟も罪の重きに悶ゆる程の靈的經驗を經たるもの、などで期く輕浮なることを得よう。（罪の苦悶を實感せずして、赦免の信仰を一の教義即ち命題として鵜呑みにする輩の如きに至つては、我等の問ふ處でない。凡そ如何なる貴き信仰も之を一の命題として鵜呑みにする時は弊害少なからぬ）。

又或人は問ふであらう、天然と人界に神の刑罰ありてキリストに神の赦免あるは同一の神にして何の故ぞと。余は答へて云はう、此世に於て我等の受くる小刑罰は神が我等に悔改歸順を促す所の警告であると。寔に之は我等が之に警められて天父に歸るに至り、以て永遠の大刑罰（心靈の死）を受けざらんためのものである。ヨリ大なる刑罰を受けぬやうヨリ小なる刑罰を神は加へ給ふのである。故に之は眞の

意味に於ける刑罰ではない。之は裁判官より罪人に課する刑罰ではない。父より子に加へる懲戒である。卽ちこれ神の「愛の笞」に外ならぬ。されば我等一度悔いて彼に歸らんか、彼は豐かなる赦免を我等に注ぎ給ふのである。

されば我等大歡喜の聲を擧げて踴らんかな。雀躍しつゝ神の寶座に至らんかな。步武堂々眞理の道を步まんかな。而して詩人と共に歌はんかな。

Immortal Love, forever full,
Forever flowing free,
Forever shared, forever whole,
A never-ebbing sea.

不朽の愛よ、永遠に充ち、
永遠に自由にして流れ、

常に頽ち、常に全し、
絶えず潮みつる海よ。（ホイッチヤ）

一六、永生の希望

キリストに於て神を知り神と交り得しは、我安心の第一歩であつた。キリストに於て神の赦免を學び得しは我安心の第二歩であつた。尚ほ殘れる「死の恐怖」を毀ち得る程の永生の信仰に入り得て、我は安心の第三歩を踏むのである。かくて後初て我は、基督信者としての歡喜と確信の生活に入ることが出來よう。

來世的信仰について普通に提供せらるゝものは所謂「靈魂不滅論」である。世人は一般に基督敎を以て靈魂不滅論を唱ふるものとする。さりながら是れ大なる誤解である。イエスは一度も靈魂不滅論を唱へなかつた。彼はたゞ天國を說いた。パウロは一度も靈魂不滅を口にしなかつた。彼は只復活を說いた。靈魂不滅論は寧ろ基督敎以外のものである。古代の埃及人は之を信じた。希臘の哲學者ソクラテスは之を

說いた。而して以後哲學上の一問題として哲學者の好んで講究する處であつた。近代の歐洲に於て或は Mesmelism と曰ふが如き、Spiritism と曰ふが如き、Telepathy と曰ふが如き、又「死者との交通」と稱するものゝ如き、各種の心靈的研究の盛にして、心靈の神秘は學者を驚かして其不滅を云ふもの多きも、基督敎以外のことである。我等は哲學上又は心理學上の靈魂不滅論に依りて來世的信仰を抱くものではない。彼と我と何の關係あらんや。我等は全然別個の根柢に立ちて永生の希望を抱くのである。

我等が「永生の希望」は我等の內心に存する心靈的根據の上に成り立つのである。第一に我等の感ずることは現世の腐敗墮落である。其中に少數の義人正士はあるも此世は大體に於て神に背けるものである。「地は全けれども世は穢れて居る」とフィリップ・モウロの曰ひし通である。キリストを殺し、ソクラテスを殺し、多くの預言者

と義人を迫害め又は殺したる此世は、常に正しき人の敵として立つものである。其中に虛人と惡人とは貴族、富豪、顯官の衣を纏うて濶歩し、眞人と善人とは貧と飢とに惱まされて居る。因果應報は此世の實狀ではない。百鬼晝行が此世の現相である。若しそれ神なくんばやむ。苟も愛の神、義の神にして存する以上は、此世以外に我等の本國が具へられある筈である。惡と罪との跋扈せずして義と愛との溢るゝ理想鄕がある筈である。若し此世を以て凡てが終結するならば、道義もなく宗敎もなく、神も佛もないのである。

もし死にし者甦へらずば飮食するに若かず、われ等明日死すべき者なればなり

（哥林多前書十五章卅二節）。

とパウロの言ひし通りである。されば此世にありては「旅人また寄寓者」（彼得前書二章十一節）なるを痛切に感ずる我等は、「我等こゝにありて恒に存つべき城邑な

し、たゞ來らんとする城邑を求む」（希伯來書十三章十四節）との情感に堪へぬものである。

次に吾人は愛する者との再會の意味に於て來世を望むものである。愛する親、愛する子、愛する夫、愛する妻、愛する兄弟姉妹、及び靈交淺からぬ法友との再會を來世に於て希求するのである。かくの如きは此世の「智者」と「達者」のいたく嘲笑する處であらう。彼等をして其嘲笑を續けしめよ。我等は我等としてこの「赤子」の如き希望に生きるものである。

遙かに仰ぎ見る　かゝやきの御國に
父の備へまし、　たのしき住處あり。
我等つひに　かゝやく御國にて
きよき民と　共に御前に逢はん。

もし神の愛にしてなからんか卽ちやむ。苟も愛の神我等を導き給ふならば、此世に於て我等に賜はりし清き愛を、此世限りに亡ぼし給はんとは、我等の信仰も常識も想像し得ぬ處である。短き世に愛の清きを味ひて、この心靈的事實の悠久なるを信ずるも何の妨げかあらう。此世に於て最も辛き、愛する者との死別の苦みが、彼世の再會に於て悉く拭ひ去られんとの希望は、神を愛として信ずる上に自ら成立するものである。宜なり、此希望が今日に至る迄多くの傷める心靈を深く慰めしことや。

「神かれらの目の淚を悉く拭ひとり、復死あらず、哀み哭き痛み有ることなし」きを望み且信じて、我等は砂漠の人生にも薔紅花の馥郁たるを覺ゆるのである。

舊友はふたゝび會し、
たとへ難き喜悅を以て手は手に握られ、
母はその失ひし愛兒をひしと抱く。

ふるき悲哀は今は忘れらる。

或は記憶せらるゝも償はれて餘りあり。（プライアント）

傷み破れし心情は長へに醫やさる。

さらば慰めよ、難める友、傷める人、此世に於て幸薄き人々！　永世の春に逢はん

日の近ければ、此世ながらに久遠の光身に浴びて、聲高らかに希望の歌を歌へよ！

吾人は又心靈生活完成の希求に於て來世の生命を信ずるものである。靈的に完全ならんことは我等の深き心靈的要求である。全く罪を離れて聖潔に達せんことは我等の痛切なる希願である。我等は靈的完成を目指して進むものである。さりながら短き此世に於て、肉につながるゝ身を以てして、この完成に至らんことは豫期せられない。進展はありても完成の期は此世にてはない。かくて我等は來世に於て、罪の悉く洗ひきよめられて、神より此完成を賦與せらるゝことを信じ且願ふのである。

「今は既に罪より救はれて神の僕となりたれば、聖潔に至るの果を得たり、その終は永遠の生命なり」（羅馬書六章廿二節）とは此事である。われ等の此痛切至極なる希願―人として抱き得べき最高最貴の希願―が愛の父によりて來世に於て充たされんとは、決して空しき希望ではない。肉の衣を脱ぎて靈の衣を纏ひ、以て繋がるゝことなき自由自在の身たらんことは、我等が心靈奥底の叫びである。

我等之を知る、われらが地にある幕屋もし壞れなば神の賜ふ處の家屋天にあり。これ手にて造らざる窮りなく保つ處の家屋なり。我等この幕屋に居りて歎き天より賜ふ我等が家屋を衣の如く着んことを深く願ふ。誠に着ることを得ば裸になることなからん。我等この幕屋に居り重きを負ひて歎くなり。之を衣の如く脱がんことを願はず、彼を衣の如く着んことを願ふ。是れ死ぬべきものゝ生に呑まれんがためなり（哥林多後書五章一節―四節）

との使徒パウロの願は正にわれ等の願である。

以上は來世翹望の心的根據にして又來世存在の憑証たるものである。而して我等に來世的生命の與へらるゝ最も確實なる證據は、今我等に聖靈の與へられ居ることである。パウロは哥林多後書五章の前掲の語に續いて曰ふた。

それ此事（永生）に應ふものと我等を爲し給ふ者は神なり。彼れ之が保証として聖靈を我等に賜へり（五節）。

と。卽ち聖靈は永生の保證として與へられたと云ふのである。保證の原語 arrabon（英語 earnest 又は pledge）。聖靈は永生賦與の手附金なりとの意である。今聖靈を賜はりて「人の凡て思ふ處に過ぐる平安」と「世の與ふる所の如きに非」ざる歡喜を味へる者は、永生賦與の保證を得て居ると云ふ

のである。パウロは更に同一の信仰を別の語で言ひ表はした。

凡そ神の靈に導かるゝ者は是れ卽ち神の子なり。……聖靈自ら我等の靈と共に我等が神の子たるを證す。われ等もし子たらば又後嗣たらん、卽ち後嗣にしてキリストと共に後嗣たる者なり。われらもし彼と共に苦みを受けなば彼と共に榮をも受くべし（羅馬書八章十四節―十七節）。

聖靈を賜はりて之に因りて我等は神の子たるを知り、神の子たるならばキリストと共に永遠の生を嗣ぐべきことを信ずと。深きかな此眞理、貴きかな此心證、永生の翹望いや更に强固なるを覺ゆ。

パウロの此信念を押し進むれば、此世に於て神を信じ聖靈を受け居るは既に永生の第一步に入れるものである。神を信じキリストを信ずるは卽ち永生なりと、これ約翰傳記者の唱導せし處である。

我語を聞き我を遣し給ひし者（神）を信ずる人は永生を有し、且審判に至らずして、死より生に移りたる者なり（五章廿四節）。

我を信ずる人は永生を有す（六章四十七節）。

永生とは唯獨りの眞神なる汝と其遣はしゝイエスキリストを知る是れなり（十七章三節）。

此世に於て神とキリストを信ずるは（卽ち聖靈を受け居るは）既に永生である。此狀態がこのまゝ續きて來世的生命となるのである。死して全然新たなる狀態に入るのではない。此狀態が死後に於て醇化せらるゝのである。肉の妨ぐるなきため更に大靈化を受くるのである。

共觀福音書のイエスは主として「天國の福音」を說いた。天國に關する彼の敎によりて察するに、彼の所謂「天國」とは半ば現世に於ける靈的歡喜の狀態を指し、

半ば來世の生命を指すが如くである。約翰傳に於ける永生と同一意である。けだしイエスは、現世と來世を一貫する基督信者の靈的生命を、二つに分たずして一として見たのであらう。

イエスの復活は否定し得ぬ事實である。其實狀を聖書に記さるゝ通りに信ずべきか否かは暫く別問題としよう。兎にかく「現存のキリスト」を信ずるものは、イエスの復活を信ぜしものである。後者は前者の結論にして又前提である。彼が何等かの形を以て復活せしことは我等の信じて疑はぬ處である。然らずしては我等が心に「活けるキリスト」を實感するを虛妄と見る外はない。もしそれキリストにして復活せしならば、我等彼を信ずるものも此靈力を分與せられて、彼にありて復活するであらう。我等は他の凡ての事に於て彼の靈能を分與せられ居れば、此事に於ても然らんことを信ずる。我等の復活とは他なし、永遠の生に入ることである。

あゝ我等は既に永生の第一歩を踏めるものである。天國の第一門を潜れるものである。我等自ら好んで之を棄つるにあらずば、我等が永遠の生命は確實である。「若し退かば我靈魂これを喜とせじ。我等退きて沈淪に及ぶべきものに非ず、信じて靈魂の救を得べきものなり」（希伯來書十一章卅八節、卅九節）。さらば悲痛に泣く人よ、患難に苦む友よ、首うなだるゝ老人よ、行路に勞れし旅人よ。慰めよ、喜べよ。歡喜の胸高く張りて大希望の歌を歌へよ。かくて「疲へたる手、弱りたる膝を健かにせよ」。汝は神の子にあらずや。汝は神の國の後嗣にあらずや。

「幸ひにして死するを見るまでは漫りに人の幸福を稱すべからず」とソロモンは云ふた。まことに人の幸不幸は生前の境遇を以て定むることは出來ぬ。幸福の中に死するを見るまでは其人を幸福の人と定むることは出來ぬ。生きて全日本を掌握せし豐臣秀吉も、其死に當つては信長の靈に襲はれて大苦悶を經しと云はれてゐる。此世

の境遇に於て不幸なりし人も、御國を偲びつゝ大希望を以て平和の中に死して幸福なる人である。佛の思想家アンリ・フレデリック・アミールは曰ふた。

死もまた應諾の事（matter of consent）たり得る。故に道德的行爲たるを得る。動物は絶命する、しかし人は其靈魂を靈魂の親に渡すと。かくの如くにして死して我等も亦幸福なる人である。

汝等心に憂ふること勿れ、神を信ずべし、亦我を信ずべし。我父の家には第宅多し。……われ汝等のために所を備へに往く。もし往きて我れ汝等のために所を備へば復來りて汝等を我に受くべし、我居る處に汝等をも居らしめんとてなり（約翰傳十四章一節—三節）。

これイエスキリストの語である。我等は死して只獨り死の河を渡るのではない。我等の友、訓慰師、辯護者—我等の主、救主、大なる伴侶—イエスキリストが我等と

共にあり我等を導きて、死の河を越えて彼方光明の國に到るのである。あゝ感謝すべきかな彼の先導！

あゝ日沒、明星見ゆ、
我を喚ぶ聲のあざやかさ！
われ大海に乘りいづる時
砂洲よ悲曲を奏する勿れ。

ゆらめく潮も眠るが如く
滿々として音なく泡なし。
無限の深海より來りしもの
ふたゝび家に歸る時は。

あゝ黃昏、晩鐘きこゆ
かくてのち暗黑！
われ船に乘りこむとき
別離の悲哀なかれかし。

時空の限界を超えて
大潮は遠くわれを運ばんも、
われ一度砂洲を過ぎなば
わが水先案內を面のあたりに看ん。

（詩人テニスン辭世の歌）

一七、歡喜の生活

人生の疑問解決せられて我悲哀は影を收めた。神を信じて、生けるキリストの靈化と慰藉の下にありて、我は此世にありて既に勝利者である。我は此世ながらに永遠の生に入りしものである。我心にキリストを迎ひまつりて我は今心に天國の幸福を味へるものである。我は此の幸福のために肉に於て失ふ所あつたかも知れぬ。然しながら、そは償ひ得て餘りあるのである。

また天國は畑に藏れたる寶の如し。人見出さば之を秘し、喜び歸り、その所有を悉く賣りてその畑を買ふなり（馬太傳十三章四十四節）。

また天國は良き眞珠を求めんとする商人の如し。一の値たかき眞珠を見出さば其所有を悉く賣りて之を買ふなり（同四十五節）。

この心靈的幸福を得んがためには、凡ての所有を失ふも亦何の悔あらうぞ。

余は此基督敎的生活にありて、此世の境遇はいかにもあれ、一種特別なる歡喜の心中に躍るを感じて感謝の念禁じ難い。又「神より出でゝ人の凡て思ふ所に過ぐる平安」の心の底深く湛へらるゝを知りて、感恩の念油然として湧く。まことにイエスが、

われ平安を汝等に遺す、わが平安を汝等に與ふ。我與ふる所は世の與ふる所の如きにあらず。汝等心に憂ふる勿れ、又おそるゝ勿れ（約翰傳十四章廿七節）

と告げ給ひし語は我を欺かぬ。此歡喜、この平安、我等これを彼に依らずして誰によりてか得べき。返すゞゝも感謝すべきはキリストを通して賜はる心靈の恩賜である。

かくて我等は與へられし地位にありて與へられし業を勵み、神の大愛の下に昌平

の生を送ることが出來る。世人の多くは競爭と苦悶の間に爭奪と虛榮と絶望と自殺との生を送るなるに、われ等は歡喜と平和の中に其日其日を樂むことが出來る。勿論我等にも艱難と痛苦とありて、時に悲哀の波に襲はるゝことがないでもない。されは文豪カアライルが蘇國詩人バアンズを評して、

彼は彼の悲哀を勇敢に投げすてた。そしてその上を勝ち誇つて越えて行つた。それは鬣から露をふるひ落す獅子の如くであつた。笑つて槍の閃動に對する駿馬の如くであつた。

と云ひたる程のことはなくとも、少くとも聖靈の慰藉に悲哀の高波を拒ぎ止むることが出來る。世人の多くは空しき歡樂に人生の悲寥を慰るなるに、我等は清き樂みを以て事足りる。神の造りし天然に遊びて我等は其光輝に心腸を洗ひ、良書に秋夜の長きを忘れて心の富を增さんとする。

もとより我等の信仰の完全ならねば我等の歡喜と平安は絶對ではない。我等の基督敎的生活に尙ほ多くの缺陷と不徹底の存するは事實である。然し乍ら我等は神に導かれて此信仰的生活に入りしことを、わが最善の道なりと信ずる。我進歩の遲々たるは兎も角、少なくとも我歩める此道の、此世に數多き道の中の最善最眞なることを信ずる。

至高者の靈に觸れし者は
彼を混濁し難く、疑ひ難く、否定みがたし。
然り、此世は一齊に彼を否定せんも、
此世は此世なり、われは我れなり。

我等はかくの如き確信に立つものである。そしてかくの如き確信に立つ我等は少しも現在の基督敎會に入る必要はない。

我等は教會より離るゝことは出來る。けれどもイエスの前に膝を屈することは出來る。我等は僧侶を疑つてもよい。教會の教義問答書などに係はることを拒んでもよい。けれども、我等を呪ふためならずして救ふために來りし聖く義き主を愛することは出來る

とアミールの云ひし通である。我等は現存の世俗的教會より離れてたゞ獨り信者の生活を營むことが出來る。もし二三又は四五の靈友を與へられんか、我等は他に求むる處ない。

されば我等は「再び壯くなり、單純にして小兒の如く、幸福と感謝とを以て今の時を過」ごせば宜い。信仰より信仰に至り、恩寵より恩寵に進み、日に夜に感謝しつゝ御國を指して上り行けばよい。されば我等をして最後に「矜恤に富める神、われらを愛する處の大なる愛により、罪に死し時にすら我等をキリストと共に生かし

（汝等惠みに依りて救はれしなり）、いまイエスキリストに在る我等を彼と共に甦らせ、共に天の處に坐せしめ給（以弗所書二章四節―六節）ひしを絶大至極の恩惠として感謝せしめよ。

全地よエホバに向ひて歡ばしき聲をあげよ。

喜びを抱きてエホバにつかへ、

うたひつゝ其御前に來れ。

知れエホバこそ神にますなれ。

われらを造り給へるものはエホバにしませば我等はその屬なり。

我等はその民その草苑の羊なり。

感謝しつゝ其みかどに入り、

ほめたゝへつゝ其大庭にいれ。

感謝してその御名を讃めたゝへよ。
エホバは恵み深く其憐憫(あはれみ)かぎりなく、
その眞實(まこと)よろづ世に及ぶべければなり。(詩百篇)

悲哀より歡喜まで 終

悲哀より歡喜まで
奥付

大正四年十二月十二日印刷
大正四年十二月十五日發行

定價九拾錢

著者 東京市麹町區平河町五丁目三十六番地 畔上賢造
發行者 東京市麹町區平河町五丁目一番地 河本龜之助
印刷者 東京市麹町區二丁目九番地 河本俊三
印刷所 洛陽堂印刷所

發行所 東京市麹町區平河町五丁目三六 洛陽堂
電話番町四二五八
振替東京二〇九一四

不許複製

洛陽堂發行圖書目錄

（家庭教育の部）

東京市麹町區平河町五丁目三十六番地

洛陽堂

電話番町四二五八番

振替東京二〇九一四番

高島平三郎著

教育に應用したる **兒童研究**

定價金貳圓八拾錢
送料金十六錢

高島平三郎著

家庭及び家庭教育

定價金九十五錢
送料金八錢

高島平三郎著

兒童を謳へる文學

定價金壹圓
送料金八錢

高島平三郎著

女の心 附錄 **嫁と姑**

定價金四十八錢
送料金四錢

元良、高島、永井、富士川合著

兒童學綱要

定價金壹圓八十錢
送料金二錢

岡村準一著

兒童保

稻葉 著

教育期

ケーラス博士著

家庭に於ける兒童教育の **理論及實際**

定價金七十錢
送料金八錢

田結宗誠著

小兒の育てかた

定價金五十錢
送料金四錢

ムーレー博士著 水野義三郎譯

一才より廿一才に至る **小供の生活**

定價金五十錢
送料金四錢

高島平三郎編

精神修養 **逸話の泉**

定價金一圓
送料金八錢

永井 潛著

生命論

定價金三圓三十錢
送料金十六錢

小酒井光次著

生命神秘論

定價金一圓六十錢
送料金十二錢

渡邊喜三著

遺傳の研究

定價金一圓五十錢
送料金十二錢

山本瀧之助著

一日一善

定價金四十五錢
送料金四錢

石川弘著

通俗孝子傳

定價金六十錢
送料金六錢

嘉悅孝子著

怒るな働け

定價金八十錢
送料金六錢

福鎌恒子著

奥樣と女中

定價金六十錢
送料金四錢

21192

手塚光貴著

忠孝

定價金六十錢
送料金四錢

山本瀧之助著

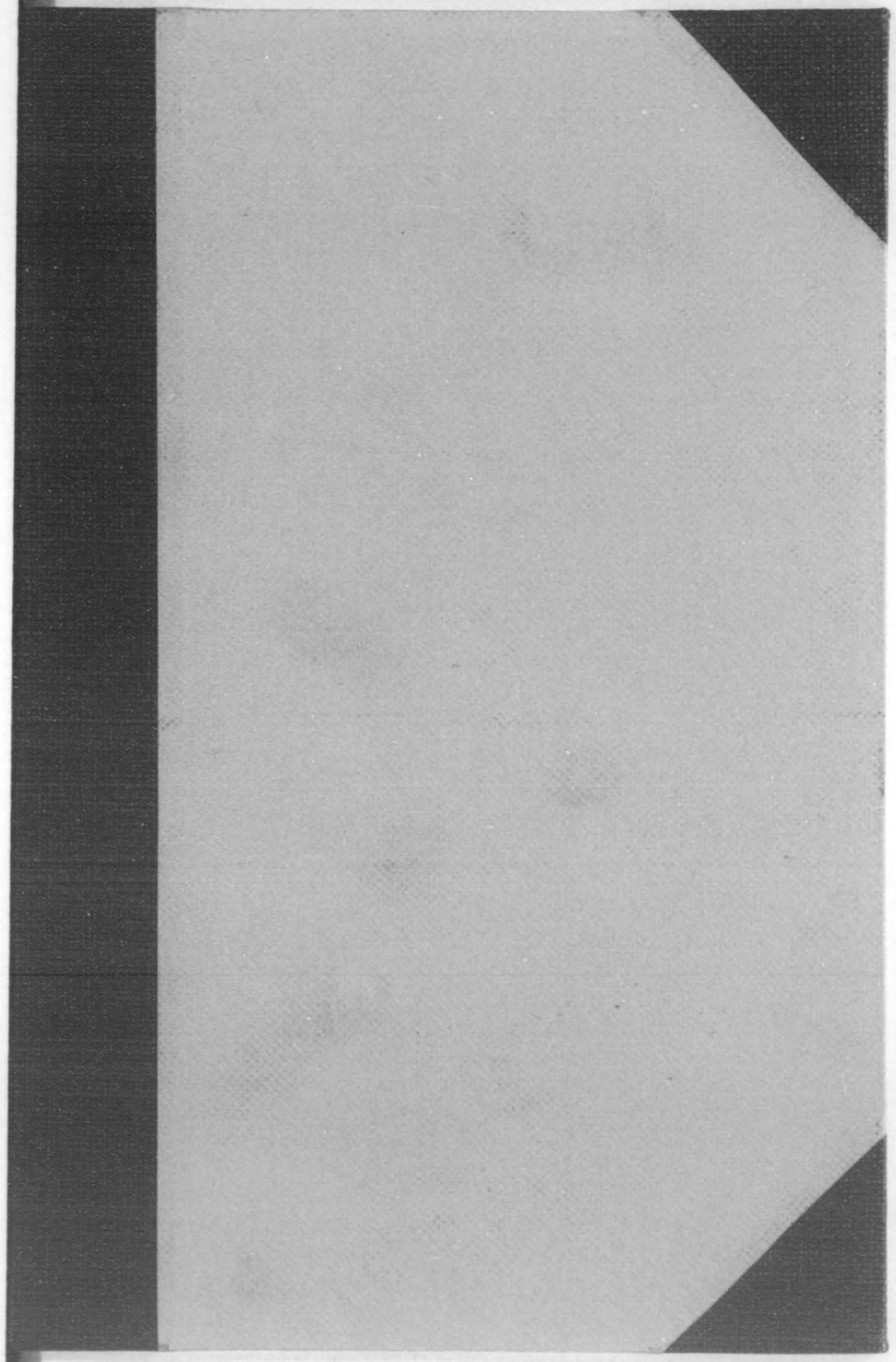
青年修養

着手の個處

定價金九十五錢
送料金八錢

花田仲之助著

報徳實踐修養講話

定價金五十錢
送料金八錢

終